

## 視点

# 能登を目指す若者たちに思う

金曜の夜、仕事を終えた教内外の若者たちを乗せたミニバンやマイクローバスが能登を目指す。関西からでは7、8時間

の片づけ、さらに豪雨災害で家屋に流れ込んだ土砂の搬出など、こまやかに対応している。教会や教区などの組織

ただ、往復に15時間以上をかけて、広大な被災地に少人数で限られた時間、限られた作業をする

常であった」とある。恐れながら、当時の凶作や飢饉の規模からすれば、教祖の施しは細やか

「ん」とお教えくださるように、「難儀なる者の味」は決して空想で計り知れるものではないだろう。

到着し、車で仮眠をとって夜が明けると作業にかり、夕方までには帰路につき、日曜に日付が変わるころ帰宅する。現地

仕事の場合で所属する団体を問わない有志であり、ほかの被災地と同様にこうした参加者の延べ人数もかなりの数に上っているという。筆者が

が、「いや、そうではない」と思い直した。教祖ひながたの難渋たすけの場面が浮かんだからである。『稿本天理教教祖伝』

性よりもその「心」ではないだろうか。ひながたによって示された「人々をたすける心」に人々が目覚めることを、ご存命の

偶然とは到底思えない大節をお見せいただいた元日から1年が経とうとして、金曜の夜、繰り返し能登を目指す若者たちが一つの示唆を与えてくれた。(橋本)

多くは24時間の弾丸ツアーである。このやり方は震災発生当初から続いており、炊き出しや倒壊物

に数人の男女が参加している。

も、その中から、食をさき着物を脱いで、困っている者に与えられるのが

か。「貧に落ち切らねば、難儀なる者の味が分から